
家庭教師ヒットマンREBORN! 夜空の守護者来る!

ソウルゲイン コード麒麟!

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家庭教師ヒットマンREBORN！ 夜空の守護者来る！

【Nコード】

N5179V

【作者名】

ソウルゲイン コード麒麟！

【あらすじ】

俺は強盗に人質にされ強盗ぶん殴ったらショットガンで打たれて死んだ

死んだ俺は神によってチート能力をもらいリボーンの世界に転生する

だがその世界のリボーンは何か違う

そう一部のキャラが女性化していた

しかもお隣さんが雲雀！？

しかも女性化してるし！？

そんな世界で俺は前途多難だが生きていく

プロローグ

俺はリボーンの世界に転生しました

え？流れが突発過ぎてわからないって？

ごめんごめん1から説明するよ

俺はコンビニでペンを買おうとしたら突如強盗に人質にされた腹立ったから強盗の顔を全力でぶん殴ってやったよ

でもあの野郎俺を脅して使ってたショットガンで撃ちやがった

全く胸糞悪かったぜあの時は

そんで死ぬで死後の世界に行くと思ったら

神と名乗る、男に

「お前は死ぬはずではなかった人、お前をリボーンの世界に転生させてやるっ」

って言われた最初は引いたよ

黄色い救急車何番だったけ？

って思ったもんだけど好きな能力と好きな姿にしてやるって言われたから

身体能力MAX

俺の知ってるアニメ、漫画、ゲーム、小説の技、力が全て使えて、イメージしただけでその姿になれる変身能力

どんな物で作り出せる能力

怪我や病気も心の病もどんな物でも治療、修復できる能力

死ぬ気の炎の精製度はS

姿はスパロボのアクセル・アルマーで

って言ったら一瞬で俺はアクセルになってた

マジか！って思ったよしかも引いたよ俺の設定

親は他界している

親が十分生きていけるだけの財産を残してくれていたから一人暮らし

沢田綱吉の親戚

獄寺とは面識があり尊敬されている

ボンゴレの元ボス候補

雲雀のお隣さん

リボンと面識があり友達

因みに名前はアクセル・アルマー

・・・笑っちゃうよね？そんなこんなでリボンの世界に転生した
転生して時計見たら6時半だったから夕食を作って食べた
夕食の後、家の中を散策していたら神からのメモがあった

「すまんそこは一種のパラレルワールドだ、一部のキャラが女子に
なっている、by神」

・・・俺にどうしろと？

正直誰が女性化してるのか気になる
そんな事を考えていると来客が来た
幸いに神がサービスで記憶をくれたから大丈夫だと思うけど
まだ完全に記憶は確認していない
とりあえず俺はドアを開けた

「は〜い何方ですか？」

ドアを開けると雲雀さんがいた、しかも女性化したキャラのうち一
人だったのだ

ちなみに名前は雲雀恭子らしい

恭弥だから恭子ね・・・単純

「何のよう?。」

「アクセル、明日並中に転校するって事覚えてるよね?。」

ああ、今やっと記憶の整理がついた、俺は小6からイタリアに留学して帰ってきたんだ

雲雀はお隣さんって事で来たんだろう

「大丈夫だ、覚えている」

「そう?じゃあご飯食べた?よかつたら夕食食べていく?。」

「ん?急に話題を変えるな、いや食ったぞ」食ったとか言ったらかみ殺すよ」いや食ってないからご馳走になっていいか?。」

「いいに決まってるよ、僕とアクセルの仲じゃないか」

「誰か聞いたら誤解を招くような言葉はやめる」

俺は雲雀の家で二回目の夕食をご馳走になった

「ちなみ何を作ったんだ?。」

「ハンバーグとご飯とワカメスープ、それとりんご」

「にしても器用だなりんごはウサギを通り越して猫じゃね?か」

「猫好きでしょ」

「まあな、本当に器用だな将来良い嫁さんになるな」

「その時はアクセルがもらってくれるの?。」

「考えとく」

そんな感じで夕食の時間が過ぎていった

「アクセル、これ渡しとく」

夕食を食べ終わって帰ろうかと思った矢先に鍵を渡された

「？何の鍵だ？」

「この家の鍵」

「何で俺に？」

「明日起こしに来て、その時にその鍵を使って」

「ことわ」「嫌だっけ言ったらかみ殺すよ」・・・わかりました、プリンセス」

こんなで俺大丈夫なんだろうか？

ブローグ（後書き）

追加設定

リポーンと友達

並中へ

ピピピ、ピピピ、ピピピ、ピピピ

目覚ましを止めてベットから起き上がる

「ふあ〜チヨイ眠いな」

愚痴ってもしょうがないのでベットから起き上がり顔を洗う
鏡を見て思う

「身長、中1にしては高くないか？」

俺の身長少なくとも174はある

これは高いと思いつつもキッチンに行き味噌汁と目玉焼きを作り
ご飯を盛る

「いただきます」

俺はテレビをつけ天気予報をチェックしながら食べ続ける
ふむ、今日は1日中気持ちのいい晴れの日か

「ごちそうさま」

食器を片付け洗い、その後洗濯物を2階のベランダに干す

今は6時45分

雲雀起こさなければならぬから早起きをした、出来れば自分でお
きてほしい・・・

俺は並中の制服に着替えバックを持ち家を出る

俺は隣の雲雀の家に向かった

一応インターホン押すか

ピンポーン・・・

もういつちよピンポーン・・・

駄目だこりゃ

靴から昨日雲雀から渡された鍵を出し鍵を回し家に入る

「おじゃましまーす」

「・・・」

「・・・返事がない、おそらく寝ているようだ」

ドラ エ風に言ってみた

俺は幼少時代の記憶をたどり雲雀の部屋に向かった
部屋の前についたところで考える

男を簡単に自分の部屋に入って起こしてくれって、どんな神経して
るだろう？

でもこのまま起こさないと噛み殺されるので意を決して入った
女の子の部屋には初めて入った

ふむ・・・少し男っぽいや部屋だなんていうか女の子っぽくない
おっといけね起こさないと

俺はベットに向かうするとそこには昨日見た雲雀とは違う天使がいた

（おいおいどんだけ可愛いんだよ寝顔まるで天使じゃね〜か、いや
これ天使でしょ？なんか起こすのに罪悪感が・・・）

でも起こさないと遅刻しちゃうし噛み殺されるし

「お〜い起きろ雲雀〜朝だぞ〜」

「う〜ん・・・」

「眠いのは分かるけど起きろ〜」

「・・・わかったよ」

お！やっときたよでもパジャマは女の子らしいな
ピンクのパジャマだ

「おはようアクセル、今日も素敵だね君は」
「そいつは有難う、お前も朝から素敵だぜ」

呆れながらも同じことを言い返す

「それはそうさ、僕だもの」
「ちがいない、さあ着替えて朝ごはん作って食べる」
「そうだねまだ寝ていたけどね」
「だったら起こしにこないぞ」
「噛み殺されたい？」
「・・・すみませんこれからもちゃんと起こしにきます」
「よろしい」

こんなんで大丈夫なのかな？俺？

「じゃあ俺は先に行くぞ」
「並中前で待ち合わせね、居なかったら噛みk」
「あゝ分かった分かったじゃあな」

俺は先に並中に向かうことにした
俺が並中に向かってしていると前で嫌がっている女の子の手を掴んで裏
路地に連れて行くこうとする不良が居た

「おとなしくしやがれ！」
「キヤ、やめてくださいー！！」

見過ごせねえな

「おい」

「んだよ！てめえ！この女の知り合いか！！？」

「いや違うがその子が嫌がってる、手を離せ」

「うるせえ！！」

殴りかかってくるがカウンターで顔面にパンチを決める

「ぐわあ！！」

「まだやるか？」

俺は不良を睨みつける

「ヒィヤ~~~~！！」

不良は一目散に逃げていった

俺はその場にへたり込んでしまった女の子に手を差し出す

「けがはないか？」

恐がれるといけないので笑顔で問いかける

「は、はい／＼大丈夫です／＼（はう、か、かっこいいな）胸がドキドキしちゃうよ／＼」

「そっかそれは良かった」

女の子は俺の手を掴んで立ち上がる

ってこの子笹川京子じゃん

「あ、危ない所を助けてもらって有難う御座いました／＼／＼／＼」
「いいよ気にしなくて、じゃ俺はこれで」

俺が立ち去ろうとすると

「待つてください！あの・・・お名前を聞かせてもらっても良いですか？／＼／」

「俺はアクセル、アクセル・アルマーだ」

「わ、私は笹川京子です／＼／」

「そうか、可愛い君に相応しいねじゃあ」

俺は今度こそ並中に向かう

京子サイド

京子はぼくとしていた

「（アクセルさんかつこよかったな／＼／）」

「京子！ごめんごめん待たせちゃった？」

「ボク／＼／＼／」

「京子？」

「ボク／＼／」

「はあ、背の高い赤髪の人」

「！！！？花！！なな、なんで知ってるの？！！」

「いやね、ついさっきのやり取り見てたからね、にしても京子もしかして・・・」

「ちち、違うの！、べ、別にまた会いたいかお話ししたいとか考えてないからね！！」

「自分で暴露してたら世話ないよ」

「はづっ／＼／」

「やっぱり！京子あの人に惚れたんだね！」

「！！！？？ななな・・・！」

「ほらっやっぱり骨抜きにされてる」

「う〜／＼／＼やっぱり分かっちゃう？／／／」

「分かるも何も顔が真っ赤よ？それでわからない人はいないって、頑張っつて！あたし応援するから」

「あ、ありがとう花／／／」

そして二人は並中に向かった

京子サイドアウト

さて俺は並中前で雲雀を待っている
すると何故かバイクに乗って雲雀が来た

「バイク通学って良いのか激しく疑問だぞ？」

「気にしなくて良いよ」

「・・・はあまあいいか雲雀だし」

「じゃあ職員室に案内するよ」

「頼むよ」

俺は雲雀後に続き校舎に向かった
周りの生徒の視線が気になったが

「ここだよ、コンコン、失礼するよ」

雲雀が入ると先生が固まった

「転校生のアクセル・アルマーを連れてきたよ、じゃあアクセル
また」

「ああ、すまない面倒かけて」

「僕とアクセルの仲じゃないか、気にしなくて良いよ」
「誤解を招くような言葉はやめろ」

そして雲雀は出て行った

「え〜とア、アクセル・アルマーさんですね？で、では教室に案内します」

先生は声を震わせながら俺を案内する

恐がりすぎだろ？雲雀の事

怒ったら手に負えないが可愛い一面もあるぞ？
たぶん・・・

「ではここで待っていてください」

俺は教室1-Aの前のドアの前に待たされ先生が教室に入っていく

「皆さんおはようございます今日はこの暮らすに新しい仲間が増えます」

ざわざわ・・・

やはり騒いでいるな

「では入ってください」

俺はドアを開け教室に入った

ツナサイド

全員が様々な視線を向けている

入ってきたのは中1にしては高い170ほど赤い髪をした男子

「アクセル・アルマーだ、まだ慣れないところもあるが宜しく頼む」

女子は黄色い声を上げ男子は睨んでいる

それにしても・・・アクセル君だったけ？

なんか知ってるような気が・・・

ツナサイドアウト

京子サイド

ま、まさかまたアクセルさんに会えるなんて！

アクセルさんって中学生だったんだ

ま、また話せるかな？／／／

京子の思いが届くかどうか疑問である

京子サイドアウト

「アクセル君の席は山本の隣ね」

俺は山本の隣の席に座った

「宜しくな、アクセル！俺は山本武だ」

「こちらこそ宜しく、いきなりで悪いんだが山本聞きたい事があるんだが」

「お？なんだ？何でも聞いてくれ」

「このクラスに沢田綱吉っているか？」

「ん？ツナか？ああいるぜ、ツナの知り合いか？」
「まあそんなとこだ」

その後は質問攻めにあってツナと話す事が出来なかった

ツナサイド

俺は今と山本一緒に屋上で弁当を食べている

「なあツナ、アクセルお前の事知ってるみたいだったけど知り合いか？」

「うん、俺もさっき思い出したんだけどアクセル兄は俺の親戚なんだ」

「あははは！アクセル兄って呼んでるのか！」

「うん、年に2、3回家に来て遊んでくれたんだ、その時からかっこよくて俺の憧れだったんだ」

「へえ〜」

「あっそうだ山本！アクセル兄今何処にいるか分かる！？」

「う〜ん・・・教室出るときは教室に居ただけだな〜」

「俺行ってくる！」

「おう」

アクセル兄、また会えるなんて！イタリアに行くっていつてもう会えないと思ってた！

ツナサイドアウト

ふう〜あたまいてえ〜ったく質問されすぎて頭痛て〜ぜ

俺は教室からでて廊下を歩いていた

教室に居ると何かとめんどいからな

「アルマーさん！」

誰かに呼び止める

振り向くとツナがこちらに走ってきた

「なんだ沢田？俺に用か？」

「はあはあ・・・オレ、アルマーさんの従兄の沢田綱吉ですけど・・・」

「やつと思い出したか」

「あ、やつぱり覚えててくれたんですね」

「当たり前だ」

「また小さい時みたいにアクセル兄って呼んで良いですか？」

「好きにしる」

俺はツナを連れて教室に戻った

並中へ（後書き）

フラグがたちました

決闘

俺は今、放課後でツナと一緒に行動している

ツナは俺の事を昔のようにアクセル兄っと呼んでいる

そして教室から出ようとしたらツナがずっとこけた

「おいおい大丈夫かよツナ？」

「あいたたた、大丈夫だよアクセル兄」

「全く情けね〜なダメツナが」

？声はするけど姿は見えず

「ん？誰だ？」

俺は声のした壁を見る

「アクセル兄？どうしたの壁なんか見て？っていつか今の声！？」

ツナも壁のほうを向くと壁が開き、リボンがコーヒを飲んでいた

「ちゃおっす」

「ちゃおっすじゃないだろ！なんで学校にいるんだよ！」

「まあ細かい事は気にするな」

「気にするよ！」

「この匂い・・・エスプレッソだな」

「おっ分かるか？」

「まあね」

「ア、アクセル兄これはその・・・」

「ニッ、久しいなアクセル・アルマー」

「ああ、久しぶりだなリボーン」
「つてえ〜〜!!! アクセル兄、リボーン知ってるの〜!?!」

俺がリボーンと会話しているとツナが声を上げた

「うるさいぞダメツナが」

「少し声を落としたほうが良いぞ」

「あ、ごめん・・・じゃなくて! 何でリボーンの事知ってるの!?!」

「何でって言われても・・・なあ?」

俺はリボーンに向かって言う

「そうだな、ダチだな」

「ええ〜! 友達なの〜!?!」

「「そうだぞ」」

「しかもハモった!?!」

「イタリアで会ってな話があつてダチになつたんだ」

俺はアイコンタクトをリボーンに送った

それを見てリボーンはニツツと笑った

「ああそうだぞ」

「そ、そうなんだ」

「なあツナお前も何でリボーンの事知ってるんだ?」

「そ、それは・・・何と言いますか・・・」

「俺は今ツナカニキョーの家庭教師をやってるんだ」

「なるほどリボーン教え方巧いからな〜」

そんなたわいもない話をしていたら3年の人が俺に突っかかってきた

「おい！お前か！アクセル・アルマーてのは！？」
「そうだが何だ？」
「持田お呼びだ！道場に来てな！」
「ああわかった、ツナ案内頼めるか？」
「う、うんこつちだよ」

俺はツナの案内で俺は道場に向かった
周りの生徒は野次馬的な乗りで道場に向かった

「京子！今朝アクセルがあんたに突っかかってきて殴り飛ばした不良、持田先輩の親友なんだって！きっとその報復するつもりだよ！！！」
「ええ！それ本当！？」
「うん！確かな筋！道場に呼び出せたらしいよアクセル、行こう京子！」
「うん！」

そして京子たちも道場に向かった

ツナの案内でやっと道場に着いた

「失礼するぞ」
「来たな！アクセル・アルマー！」
「あんたは？」

「俺は3年の持田だ！今朝は俺の親友を殴ってくれたそうじゃないか」

「ん？お前の知り合いか？あいつは嫌がっている京子を無理やり裏路地に連れて行こうとしていたそれを止めたまでだ」
「問答無用！俺と勝負だ！敵を取ってやる！」

はあ〜面倒だな、だがもう引き下がれる状況じゃないしな

「いいだろう、ルールは？」

この時持田の口が緩んだのを俺は見逃さない

「ルールは10分間で1本でも俺から面、胴、小手を俺に決められたお前の勝ちだ賞品はもちろん、笹川 京子だ!!」

「え!？」

京子が声を上げる

「待て京子は関係ないだろう」

「ふん!親友が狙った女だ俺が手にいれてやる!

「サイテーだな」

俺は近くにあった竹刀を持った

「さあやるつか」

「!!!防具を付けないのか!？」

「いいハンデだろう?これで俺には直にダメージが来る」

「いいだろう!行くぞ!!!」

「試合開始!!!」

持田が竹刀で切りかかってくるが殴りかかって来ると言った方が正しい

大振りすぎて軌道が読める

「くそ!何であたらない!!!？」

「大振りすぎるんだ、よ！！」

俺は持田の頭に面を決めた
だが審判は旗を揚げない
やはりいきがかかっていた部員か
なら

俺は持田に再び面を決め連続で小手、胴、面を決める

「ぐおお！」

「京子を商品扱いした罰だ」

俺が再び面を決めようとしたら

「待てあれを見る！」

持田が指差すほうを見るとツナが剣道部員に取り押さえられていた

「これ以上攻撃したら沢田どうなっても知らないぞ」

「下種が・・・」

「ご、ごめんアクセル兄、俺がドジなばかりに・・・」

「ツナお前に落ち度はない」

さてどうするか・・・

「俺の出番だな」

リボーンの俺がしたので上を見るとリボーンがサイレンサー付きの
ライフルでツナを狙っていた

「（ま、まさか・・・）」

そして俺は確信した
この世界で楽しく生きていけると

人間爆撃機　ハリケーン・ボム襲来

さてさて俺はツナと帰り道の途中で別れ家に戻ってきて

洗濯物を取り込んで、風呂に入った

風呂から出たら白いＴシャツに黒のハーフパンツに着替えて夕食を作り食べた

途中で雲雀が乱入してきて俺の家のスペアキーを持って行ってしまった

返せつと言ったらやっぱり

「かみ殺すよ」

って言われた仕方なく渡すと

「これでお互いの家の鍵を持っているんだから、おあいこだよ」

つと言って帰ってしまった

・・・何がしたかったんだ？

俺はその後色々あったから直ぐに寝た

そして翌日・・・

俺は昨日と同様に雲雀を起こし学校に向かった

「あ、おはようアクセル兄」

校門を通ったところでツナにあった

「おう、おはよう」

「ああ、あのお、おはよう、ツナ君、ア、アクセルさん／＼／」

後ろから京子が挨拶してきた

「あ、おはよう京子ちゃんノノ」

「おはよう、京子、そういえば雲雀がなんか言ってたのを思い出した」

「何かつて？」

「今日転校生が来るらしい」

「え？また？」

「ああどんな奴が来るんだろうな？」

「楽しみね」

俺達は教室へと向かった

そしてHR

「えー今日は転校生を紹介する、イタリアに留学していた、獄寺隼人君だ」

やっぱり獄寺だ

「ちょっとチヨクかつこよくない？」

「しかも帰国子女よ!？」

「でもアクセル君のほうがいいかな？」

・・・ツナは？

「イタリアってことはアクセル兄と同じか」

獄寺はツナに近寄り机を蹴り飛ばした
相変わらず過激だな

獄寺はずっとツナを睨み続けていた
ツナ大丈夫かな？

忘れていたが今日は球技大会だ
俺もメンバーに上がっている

ツナも出るようだが大丈夫かな？

ツナは球技大会の前に急いで教室を出て行った
おそらくリボーンを探し行ったんだろう

「なあアクセル、ツナ何処いったんだ？」

「さあな？緊張して深呼吸でもしに行っただんじやない？」

「お、おまたせ」

ツナがようやくやって来た

「おお！ツナどうした緊張してんのか？」

「う、うん・・・山本は大丈夫なの？」

「おう、平気だぜ」

「こういうのは場数を踏んでるとラクだからな」

「アクセル兄も？」

「まあな」

そして球技大会が始まった

アニメどつりになりそうだったが俺がいたので少しは違った
だが結局リボーンがジャンプ弾をツナに撃ちアニメどつりの流れに
なった

あれ？いつの間にか獄寺がツナを連れてどこかに行ってしまった

「面白くなってきたな」

いつの間にかリボーンが俺の肩に乗っていた

「いつの間に・・・てかりボーンやっぱりお前が隼人呼んだのか？」

「ああそうだぞ、ツナの事話したら、「何！そんな奴が、10代目になるのに相応しいのはアクセルさんだ！！！」とか言ってたな」

「まだそんな事いつてたのか・・・さて一応見に行こうぜ？」

「そうだな」

俺はツナ達の後を追った

中庭では隼人がダイマナイトを投げつけていた

「ふう、はあ！！」

俺はダイマナイトに向けて殴り拳圧でダイマナイトの火を消した

隼人は舌打ちして、俺の方に顔を向けるとビククリしていた

「ちやおっす」

「久しぶりだな獄寺隼人」

ツナも俺の方に顔を向けた

「リ、リボーン！！アクセル兄も！！」

「予想より早かったな獄寺隼人」

「リボーンとアクセル兄の知り合いなの！？」

「ああ、ファミリーの一員だまあ俺も会うのは初めてだけだな」

「あり？話したんじゃないの？」

「電話だったからな」

「なるほどな」

「あんたが9代目が最も信頼するというヒットマンリボーンか噂は聞いているぜ

そしてお久しぶりですアクセルさん！待っていてくださいね！今の軟なのを消して貴方を10代目にして見せます！」

「うーんただいな隼人お前もツナの事も分かればその考えも変わると思うぞ？」

「え！！？アクセル兄！なに言ってるの！？」

「ですがコイツは軟弱すぎるですよ！！コイツを殺つて貴方を10代目に見せます！リボーンさんそれで良いんですね！？」

「その通りだぞ」

「はあ！？何言ってるんだよ！！」

「さあ、レッツ殺しタイム！」

獄寺は再びダイナマイトを手にする

「どっからだしたの〜！？」

「隼人は人間爆撃機、ハリケーン・ボムっていう異名を持つてるからな」

「果てる！！」

ダイナマイトを投げるが何とかツナはよけたが爆風で吹き飛ばされてしまった

「これで終わりだ！果てる！」

獄寺は更にダイナマイトを投げつける

「うわあ〜！！！！」

「死ぬ気で戦え！」

リボーンはツナに死ぬ気弾を打ち込む

「リ・ボーン！！！！死ぬ気で消火活動する！！！！」

ツナは手でどんどん火を消していく

「な！？3倍ボム！！」

だが最初に投げたボムの3倍の量を投げようとするか落としてしまう

「ジ・エンド・オブ、俺・・・」

だがツナは落としたダイナマイトの火を全て消す

「ふう〜何とか助かった・・・」

「やれば出来るじゃん、ツナ」

獄寺はツナに土下座をした

「御見それしました！アクセルさんがボスにならない今貴方こそボスに相応しい！！獄寺隼人一生貴方に付いて行きます！！」

「ええ！？」

「負けた奴の下につくのがファミリーの掟だ、良かったな部下が出来て」

「おめでとさん、ツナ

隼人、おれもツナに付いて行くからな、宜しく頼むよ」

「ハイ！アクセルさん！！」

「普通の友達でいいんじゃないの!？」

「そっはいきません!」

「(こ)、恐くて言い返せない・・・)」

すると3年の不良共がパンツいつちよのツナを笑っている

「・・・隼人いきなり仕事が出来たみたいだ・・・」

「そっつすね・・・」

この後不良達は獄寺の手ダイナマイトによってポッコボコにされました

アンケート

早いとは思いますがオリジナルのボックスを募集したいと思います
夜空の炎の特徴は吸収です

どんなボックス兵器でも構いません

たとえ架空の生物、地球上に存在しない生物

例 龍 鳳凰 ペガサス

幾つでも構いません

後アクセルの波動は複数潜在します

夜空だけではなく他の属性も潜在します

それも募集したいと思います

例 大空 雷 晴 嵐

といった感じです

そして必殺技もです

例 コード麒麟 Xバーナー 夜空バージョン

因みに武器はソウルゲインの腕と肘ブレード そして長剣です

ご意見お待ちしております

風紀委員に入る

こんにちわ

アクセル・アルマーです

俺は今ツナの家に向かっています

今日はツナがリポーンに勉強を教えてもらってるので差し入れを持
つていきます

ついでに奈々さんにケーキを持ってきた

おっとついたな

よしピンポーン

「は〜い？」

奈々さんがドアを開けて出てきた

「え〜とどなたでしょうか？」

「俺ですよアクセル・アルマーです」

「まあ！アクセル君なの！？まあ〜久しぶりね〜帰ってきたの？」

「ええ今は並中に通っています」

「あらあ〜ツ〜君と同じなのね」

「ええ後これどうぞ」

俺は持つてきていた最高級のケーキを渡した

「あらあ〜いいの？」

「ええ皆で食べてください」

「さあさあ上がってツナは二階にいるから」

「じゃあお邪魔します」

俺は家に上がり二階のツナの部屋を開けようとしたら爆発が起こった

「派手にやってるな」

俺はドアを開けた

「ちゃおっす、リボーン、ツナ」

「おっアクセルちゃおっす」

「あ、アクセル兄からも言ってるよ」

「なにを？」

「だってリボーンの奴問題間違えるたびに爆破するんだもん！」

ああその事か

「無理だ」

「え！？なんで!?!」

「それがリボーンのやり方だ俺がとやかく言ってるいい事じゃない」

「そ、そんなあ」

「次の問題行くぞ」

「はあ・・・?」

ツナが外を見るとランボが銃を構えていた

「あ」

「ちね！リボーン？」

乗っていた枝が折れて落ちていった
ただどすぐに部屋に入って来た

「よゝリボーンお久ぶりグッピャ!!!」

リボーンはすぐさまランボをたたき出した

「ははは容赦ね〜なりボーン」

「まあな さあ続きやるぞ」

「え〜!」

この後俺も参加しツナに勉強を教えた

次の日・・・

昼休み

俺は山本、獄寺、ツナと一緒に昼食をとっているすると放送がかかった

『1・Aアクセル・アルマー5分以内に応接室に来て来なかったら？み殺すからね』

「やれやれ」

「アクセル兄！早く行かなきゃ！」

「そうだなじゃあ俺いくから」

俺は応接室に歩き出した

走ったら怒られるからね

俺は5分びつたりで応接室についた

「来たぜ？雲雀」

「5分びつたりだねさすがアクセル」

「ありがとうだがよもう昼休み終るぜ」

「大丈夫だよ僕が先生に言ってるから」

「そうかって何で呼んだんだ？」

「アクセル、幼馴染として頼みがあるんだけど」

？雲雀が改まるなんて珍しいな？

「なんだ？俺に出来る事だったら何でも言ってくれ」

「じゃあ風紀委員に入ってよ」

・・・はい？

「え〜と確認のため聞くがつまり俺に風紀委員に入れと？」

「うん」

「なぜに？」

「最近忙しくなってきたからたまにでいいからやって欲しいんだ」

「まあいつか」

「ありがとう／＼／」

え？雲雀が照れた？

「じゃあこれ渡しとくよ」

雲雀から渡されたのは『風紀』と書かれた腕章だった

「それは風紀委員である証でもあるからね」

「なるほど」

「じゃあ風紀委員のメリットを教えてあげるよ」

「え？メリットなんかあるの？」

「うんあるよ」

「どんなの？」

正直気になる

「無断欠席、無断早退、遅刻、授業参加無視そういう物を無許可で
する事を許可する」

「いいのか？それ？」

「僕が良いって言ってるんだからいいんだよ」

まあ雲雀がiiiって言ってるんだからいいか

「わかったよ」

「じゃあこれからコーヒーでも飲むかい？」

「ああもうっよ」

俺は雲雀の淹れたコーヒーを飲みながら雲雀と雑談をした
気付くと放課後になっていた

「ん？もうこんな時間か、お前と話すと時間を忘れちゃうな」

「そう／＼／」

やっぱり雲雀が照れると可愛いな

俺このままだと雲雀に惚れるかもな

「じゃあ俺は帰るよ」

「そう・・・じゃあまたね」

「ああ、ニコッ」

俺は笑いを雲雀に向けて応接室から出た

さて帰ってご飯作るうっよ

まさかの対面

今日は朝早く（5時）起きて雲雀を起こして一緒に向かう

「ああそうだと雲雀今日は仕事手伝うぜ」

「そう？じゃあ並森の見回りをお願いね」

「あれ？風紀委員って並森町の見回りまでやってるの？」

「うんやってるよ」

「じゃあ授業は？あつそうか無許可でいいんだっけ？」

「そうだよその前に腕章付けてよ」

「あつそうか」

俺は事前に貰っていた腕章を付けた

「じゃあ行ってくるよ」

俺は雲雀と別れてまず並中商店街にやって来た

周りは俺の左腕に付けている腕章を見ると恐がっている

そんなに風紀委員って恐ろしいか？

っていうか学校だけじゃなくてなんで並森全域で風紀委員最強伝説があるの？

下手したら警察より強いじゃないか？

見回りをしていたら女の子を連れだ女性が明らかに柄が悪い男が絡んでいる

「おい！さつさとこい！！」

「やめてください！！」

「うっうっ……」

女の子は泣きそうだな
それに並森の風紀を乱している対象に当てはまる
俺は男に近づく

「おいお前・・・」

「あん！？なんだ・・・よ・・・」

男は俺の腕に付けている腕章を見て一気に顔を青くする

「お前この人達に迷惑をかけて風紀を乱しているね？」

「ちちちちちがう！ただ誘拐しようとしただけだ！」

いや馬鹿だろコイツ？

どっちにしる風紀を乱してるんだよ

「もっと立ちが悪いな」

そう言いながら男を一応持っていた捕縛用の縄で縛り上げる

「お前は風紀委員長に引き渡す」

男の顔は青を通り過ぎて灰色になった

「すみませんが委員長に連絡するので少し待っていただけますか？」

俺は先ほど男に絡まれていた女性に優しく話しかける
女性は女の子を抱きしめている

「あ、ありがとう、私たちを助けてくれて・・・」

「当然の事をしたままでですよ、ちょっと失礼・・・」

俺は雲雀の携帯に電話をかける

「もしもし？雲雀、見回り中に誘拐未遂犯を捕縛したんだけどさ悪いけど取り来てくれない？」

俺は誘拐されそうになった人達の安全確保をするからさ」

『解ったよ僕はいけないけど草壁を向かわせたからね』

「ああわかった」

俺は携帯を閉じた

程なくし草壁さんが来た

「ご苦労様でしたアクセルさん」

「じゃあお願いしますよ？俺はこの後見回りして帰ると伝えてください」

「はい」

草壁さんは犯人を連行していった

俺は改めて二人に向き合う

・・・って！この人アリアさんじゃん！！！！

「も、もう大丈夫ですよ」

「本当に有難う、日本に旅行ジャッポーネに来たらいきなりこんな事に巻き込まれちゃって

あ、私はアリアよ」

やっぱりジツリヨネロファミリーのアリアさんだ

じゃあこの子は・・・まさかユニい！？

「この子は娘のユニよ」

「た、助けていただいてありがとうございます／＼」

ユニは少し照れているようだな

やっぱりユニか・・・もしかして俺が介入した影響で原作が大きく変わってるのかな？

「俺はアクセル・アルマーです宜しくお願いします」

「ア、クセル？お兄ちゃん？」

「もうユニったら・・・」

やべえ〜俺一人っ子だったから一回でいいからお兄ちゃんとか兄さんって言われてみたかったんだよね

「どうしたの？アクセル君？」

おっとついぼ〜っとしてしまった

「いえそれよりこれからどうするんですか？」

「そうね〜ホテルにでも泊まるうと思っただけど・・・このあたりホテルはないし・・・」

「じゃあ俺の家に来ます？」

「え！？」

「俺の家になら幾らでも泊まって貰ってかまいませんよ？」

「でもご家族の人に迷惑がかかるのでは？」

ユニこの時から礼儀正しいな・・・

「いえ大丈夫ですよ、俺に家族なんか居ませんし」

「え？家族が居ない？」

「両親は俺が小さい時に死んでしまって一人暮らしをしてるんです

でも両親が十分に生きていけるだけの財産を残してくれたので一人暮らしをしてるんです」

アリアさんとユニは顔を暗くしてしまった

「ごめんなさい・・・悪い事を訊いてしまいました・・・」

ユニは顔をかなり暗くしてしまった

「大丈夫だよユニ、今は友達とかが優しくしてくれるから寂しくないよ

でどうします？俺に家なら幾らでも居てもらっても構いませんし歓迎しますよ？」

「じゃあお願いしてもいいかしら？」

「ええじゃ行きましょうか？」

「ええ、ユニ行くわよ」

「あ、はいじゃあお世話になりますアクセルおにい・・・アクセルさん」

「別にお兄ちゃんでもいいよ」

「はい！お兄ちゃん！」

うぐっ！

クッなんかお兄ちゃんと言われるとぐっと来るのは何故だ！？

俺はアリアさんとユニと連れて俺の家に向かった

問7を教えて

ちやおつすアクセルです

いやあ〜驚いたな〜まさか現時点でアリアさんとユニと知り合いになっちまうなんて

今は俺の家でくつろいでもらっている

因み昼食はアリアさん達の希望で日本食を作りました

ご飯に味噌汁に焼き魚、肉じゃがに天ぷらを作りました

ちよつと張り切りすぎました

でも大好評でした、よっしゃ〜!

その後アリアさんはユニと一緒にTVを見てます

なんでもイタリアとは違う所があつて面白いそうです

俺は皿洗いを終らせたなら携帯がなつた

俺は携帯を出していったん部屋に入り通話ボタンを押す

「もしもし?」

「あ!アクセルさん!こんにちわ!」

おつ誰かと思つたら隼人が

「お〜隼人じゃんどうした何か用か?」

「実は今10代目となぜか山本と宿題やつてるんですが・・・解らない問題があります・・・」

もしかしてハルが問7を解こうとする日か?

「それでなんかアホ女が乱入してきて自分が解いたらリポーンさんを自分の家で暮らさせるって

アホみたいな事をぬかしてきたんですよ」

「隼人が解らないなんて珍しいな、いいよ今からそっちに行くから」
「有難う御座います！」

ツピ

さてと原作ブレイクだな

「アリアさん、ユニ、俺ちょっと出てきますんで自由にしててください」

「わかったわ」

「はい」

「じゃあいつてきまゝす」

「「いつてらっしやゝい」「」

アリアさんとユニに見送られて俺は雲雀に貰ったバイクでツナの家に向かう

警察に捕まったら風紀委員だって言えばOKになるらしい
本当風紀委員最強だな

俺はバイクをかつ飛ばしツナの家に向かった

そして程なくしてツナの家

俺はツナの家の敷地内にバイクを入れてドアをノックする

「あらあゝアクセル君、ツナなら2階よ上がって上がって」

「おじゃましまゝす」

俺は家上がりツナの部屋のドアを開いた

「来たぜ隼人」

「あ、アクセル兄！」

「アクセルさん!!! すいません! お忙しい中来て頂いて!」

「構わないって」

「よお！アクセル！」
「おっす山本」

俺は挨拶を済ましテーブルの近くに座った
ハルは必死解こうとしている

「っで俺がその解らないという問題を解けばリボンが引越ししな
くて済むんだな？」

「（引越し？）う、うんそうなんだよ」
「じゃあ問題を見せてくれ」

俺はツナから問題用紙を受け取った

「・・・なるほど理解した」

「ええ！？もう！？まだ10秒ぐらいしか経ってないよ！？」

「すごいなアクセルもう解っちまったのか？」

「理解しただけで解いたと入ってないです！」

「まあこの問題が解けないのは無理もない」

「え？なんで？」

「だってこれ超大学級の問題だぜ？」

「そうなのか？」

「ああ、これは証明できないが正解だ、もし最初から紙がのりで付
いていれば寸分たがわずに落ちるだろうな」

「「「おっ！！」」」

「そ、そんなあゝ・・・」

ツナ、隼人、山本は喜びの声を上げた

ハルはリボンはツナを立派なマフィアにすると言ったら

あきらめたようなまだあきらめないという顔をして帰っていった
俺はすぐに帰った

夕食を考えながら家に向かった

「ただいま」

「あ、お帰りなさい お兄ちゃん」

ユニが出迎えてくれた

「ああただいま、アリアさんは？」

「お母さんはTV見てますよ？」

「ふ〜ん今日の夕食は外で食べようと思っただけど？」

「何にするんですか？」

「折角 ジャッポネ 日本に来たんだから寿司を食べてもらおうと思ってね」
「おすし・・・ですか？お母さんに聞いてきます」

ユニはトコトコつと歩いていった

・・・可憐だ・・・

なんか保護欲が出てくるな

ごほん！俺はロリコンではない！

程なくしてユニがアリアさんを連れてきた

「お待たせ、お寿司なんて楽しみ 食べてみたかったのよ」

「楽しみですね」

「じゃあ行きましょうか？」

俺は二人を連れて竹寿司に向かった

アリアさんは鰹とトロとイカが気に入ったらしい

ユニはイクラと卵、うにが気に入った

二人は帰る時に満足気な顔をしていた

因みに金は俺が持った

お会計は68105円だった

初めて辛いと思ったバレンタイン

グーテンモルゲン・・・
アクセルです・・・

今日はテンション低いですなぜかって？

アリアさんとユニがイタリアに帰ったんですよ

わかつちやいたんだけどね寂しいもんなんですよ

家に帰ったらおかえりって言ってくれる人がいないと・・・

それにユニにお兄ちゃんって言われるも悪くなかったし・・・

それで俺はいつもどおりに雲雀を起こしに来たが雲雀のドアに

『今日は先に行くから』

というメモが貼ってあった

「なら俺に言えよ・・・」

俺は文句をいいながら家に戻り7時45分まで時間を潰し学校に向
かった

そして自分の下駄箱のあるロッカーを開けるとチヨコが雪崩のよう
に落ちてきた

チヨコには

『アクセル君へ？』

と書かれていた

「・・・なぜか袋を持っていったほうが良いという第六感はどうい
うことだったのか・・・」

俺はチヨコを丁寧に取り袋に入れる

俺は教室に向かうがその途中でもチヨコを渡された

そして教室に着いたが机の中と上にも大量のチヨコがあった

「……はあ……」

俺はチヨコを袋に詰め席に着いたがその後も

立て続けに休み時間にチヨコを渡されまくった

行くとこ全て女子に先回りされ逃げ回る事になった

おかげでまとも弁当を食う暇もなかった

俺は放課後に応接室に向かった

「雲雀入るぞ」

俺は応接室のドアを開けソファに座った

「アクセルどうしたの？」

「それはこっちの台詞今日はどうした？先に行くんなら俺に言ってくれよ」

「で何しにきたの？」

「女の子達のせいで弁当が食べなかったんだここで食わせてくれ」

「……噛み殺されたいの？」

「!？なぜに!？」

「どうせチヨコ貰ってるでしょ？それ食べればいいじゃん……」

「おいおい……鼻血出すぎて出血多量で死ぬわ」

「ふん……」

あれ？なんか雲雀怒ってる？

「おいおい雲雀なんか怒ってないか？」

「怒ってない・・・」

「おい、頬膨らませてもお前の場合説得力がないぞ」

「煩い・・・／＼／」

「それと頬を赤くするな」

と言いながら弁当を食う俺

「さりげなく食べないでよ」

「食うことぐらい勘弁してくれよ・・・今日は書類仕事手伝うからさ」

「・・・じゃあさっさとやっつてよ」

「はいはい」

俺はさっさと弁当を食べ書類仕事に励んだ

そして3時間後・・・

「グハア〜やっつと終わったあ〜・・・」

「お疲れ様」

「幾ら手伝うって言ったからって今月全部の書類やらせる事ないだらうが・・・」

「はいお礼」

雲雀は俺に小さな箱を渡してきた

「これは？」

「今日が何の日かわかってる？」

「なにつて？あ！バレンタイン！じゃあこれ俺に？ってええ〜！！」

「なんでそんなに驚くの？」

「いやなんで・・・」

「受け取らなきゃ噛み殺すよ?」

「あゝはいはい」

俺は噛み殺されたくないの大人しく受け取る

「後これもあげるよ」

雲雀は俺に顔を近づけてくる

「な、なにを?」

「黙って」

雲雀はそのまま顔を近づけ頬に・・・

チュッ

「え?は?へ?」

「じゃあ僕はこれで////////」

雲雀は真っ赤になって応接室から出て行った

「え?あ?は?へ?」

俺は思考停止状態に陥った

え？雲雀が？え？なに？

追加アンケート

ただいま家庭教師ヒットマンREBORN！ 夜空の守護者来る！
ではアンケートを募集中です
オリジナルのボックスを募集中
夜空の炎の特徴は吸収

どんなボックス兵器でも構いません
たとえば架空の生物、地球上に存在しない生物
例 龍 鳳凰 ペガサス

幾つでも構いません
後アクセルの波動は複数潜在します
夜空だけではなく他の属性も潜在します
それも募集したいと思います

例 大空 雷 晴 嵐

そして必殺技もです

例 麒麟 Xバーナー 夜空バージョン

因みに武器はソウルゲインの腕と肘ブレード そして長剣です

そして新たにどんなキャラを女性化するかです
今考えているのは骸です
ではご意見お待ちしています

六道 骸・・・狙いは俺！？しかも・・・え！！？

ちやおっすアクセルです

今回は風紀委員として校舎の周りを見回りしてます

どうやら骸達によって並中生狩りが始まったので俺にも雲雀から依頼が来ました

っていうか

「やってくれなきゃかみ殺すよ？」

と言われちゃったので渋々やってます

俺雲雀の言いなりですね

雲雀が女じゃなくて男だったら何かしらやると思っけど・・・

一応今も武器も持ってます

俺お手製のソウルゲインの腕

やっぱりアクセルなんだからソウルゲインでしょ？

これで

「リミット解除！コード麒麟！！」

とかちよつとやってみたい・・・

「アクセル」

見回りをしていると雲雀にあった

「なんだ？」

「これから僕はちよつかいを出してくる奴を噛み殺して来る」

「！！・・・俺も行くぜ」

「だめだよ僕一人で行く群れるのは嫌いなんだよ」
「だがよ……」

雲雀の首元に刺されたような後がある

おそらくもう桜クラ病にかかってしまったんだろう

「心配しないでよ直ぐに戻るさ」

そう言っつて雲雀は行ってしまった

「雲雀……」

俺は少しの間その場に立ち尽くしいったん家に戻り
アクセルの服に着替えその後黒曜ランドに向かった

黒曜ランドに着いたはいいいが入り口はなにかで溶かされたような感
じになっていた

「こいつは……ビアンキの溶解桜餅……」

もう着てるのかよ……

やれやれ手のかかる従弟だぜ

俺は黒曜ランドに入り階段を上るとツナ達がMMを倒した所だった

「おいツナ何やってるんだよ？」

「え？つて！あ、アクセル兄！！？」

俺の姿を見ると驚いたように声を上げた

「んだよ化け物見たみたい声上げやがって」

「いや！そう訳じゃなくて！」

「アクセルさん！なんでここに！？」

「お！アクセルもマフィアごっこ参加か？」

「あら久しぶりねアクセル」

「おひさしビアンキやっぱりあれは溶解桜餅か」

「ってなんでアクセル兄がここに！」

「雲雀が帰ってこないから心配になって見に来たんだ俺も風紀委員だからな」

「え！？アクセル兄風紀委員だったの！？」

「まあね」

「おうち私を無視しないで頂きますか？」

「「「「あ？」「」「」」」」

声のする方向を向くとバースがいた

俺はさりげなく左腕を回転させる

「おうちちちち」

「黙れこの糞じじい玄武剛弾！」

京子達が人質が取られないようにすぐさま玄武剛弾を放つ

「ぐひゃ〜！！！！」

バースはたった1発の玄武剛弾でのびてしまった

後あのキモイ二人組俺がここに来る間にポッコポッコにしました
骨を8、9本折りました

「先手必勝 ってやつだな」

「す、すげえ〜ってか容赦ね〜！！」

「さすがアクセルさん！」

「容赦ないのな」

「何を言う山本、敵に容赦は要らんそれがマフィアごっこだ」

「そうなのか？」

「そういうもんだぞ」

「さっすがリボン解ってるう」

「（な、何気にアクセル兄・・・遊びだと思ってる・・・）」

「その通りよ山本 武 甘さなんて見せてたらこっちがやられるわ
よ」

「じゃあ俺は先行ってるわ」

「え！？ちよつと！アクセル兄！！一緒に！！！！」

俺はツナの叫びなんてスルーして近くの森から建物に向かった
すると人の気配を感じた

「誰だ？いるのは分かってる出てこい」

「・・・クフフフ」

近くの木の陰から出てきたのは六道 骸だった

「君が並森中学1-A 風紀委員所属 アクセル・アルマーですか」

「ほう・・・俺の事を知ってるのか・・・」

「クフフフ・・・話には聞いていましたが・・・いい男ですね」

「は？」

今こいつ何だった？

「風から聞いていましたが・・・これほどの上玉だったとは・・・」

はいいいいいい！？

おいおいおいおい！！骸さんよ！あんたそんなキャラだったけえ！？

てかもしかしてあんた女あ!!!!!!?????

ってチヨイ待てよ・・・風から聞いてた?・・・

風ってクロームだよな・・・

待て思い出せ!!!!

・・・あ!思い出した!!

俺、風とメツチャメチャ仲が良くて親友だったな・・・

という記憶がある・・・

「六道 骸・・・風の事を知ってるのか?」

「ええもちろんです」

・・・え?なんで?骸?この時点であんた幻覚散歩してたの?

「でなんで並中生を襲う?俺が風紀委員だってわかったの攻撃だよな?」

「襲うなんて・・・僕が襲いたいのは君だけですよ」

!?

俺は思わずっこけそうになった

「なんだそりゃ!?!」

「つまり並中生を襲えば風紀委員である君が出てくる可能性が高い」

ああ・・・そういう事か・・・襲いたいの俺だけってどういふことだっと思ってたぞ・・・

「で?なんで俺を狙う?」

「君が欲しいからですよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・はあ!!!!!!?????」

俺が欲しい!!? どういう事!?

「おい! それってどういう!」

「ふうん君の取り乱した顔もまた良い」

「おい! スルーすんな!!」

「クフフでは此処に来たボンゴレを倒して君を僕の物にして見せませよ」

「・・・それは無理俺は未来のことを知っている」

「! ほうそんなことも・・・クフフフフでは僕の未来も知っているというのですか?」

「ああ・・・」

正直このまま骸には逃げて欲しい・・・

骸は好きなキヤラだからな

「骸はこれからツナと戦い負けてマフィアの掟の番人である復讐者ヴィンデチエに

連れて行かれ・・・最下層の牢獄にぶち込まれる・・・」

「!!!! 僕が・・・沢田綱吉に負ける・・・?」

骸は信じられないという顔で俺を見つめる

「そう・・・ですか・・・それが僕の未来・・・運命ということですね・・・」

「何故簡単信じる? 俺は嘘言っているのかもしれないのだぞ」

「・・・風は相手がどんな相手であろう嘘を付いたりしないと言っていましたからね」

「そうか・・・風の奴・・・」

「それが僕の運命であるのなら受け入れる必要がありますね、何せ相手は復讐者ですからね」

「・・・わりい俺にはどうしようもできない・・・」

「僕の未来を教えてくださいただ嬉しかったですよ」
「骸……」

「ってあれ？いつの間にか俺骸に心許してる？」

「では僕達も行きますようか」

「僕達？」

俺はなぜかとんでもない急激な眠気に襲われた

「なんだ……こ……れ……は……」

俺は眠気に負け眠りに付いた

「さあ行きましょう」

アクセルは骸に抱きかかえられ黒曜ランドの中に入っていった

骸 雲雀勘弁してくれ・・・

・・・え〜と俺どうしたんだっけ？

確か骸と会話してるときにいきなり睡魔に襲われて睡魔に負けて

その後は・・・覚えてね〜や

とりあえず起きるか

目を開く俺は横になっていた

しかも・・・俺の上には骸がこつちをガン見しながら俺の上で馬乗りしている

「・・・おい何やってるだ骸」

「クフフ君の体温を間近に感じているんですよ」

「いい加減にしろ・・・それとお前やつぱツナと戦うのか？」

「ええそれが僕の運命ですからそれに身を委ねますそれと君の体はロープで自由を奪っています

何かしたほうが言い訳しやすいでしょう」

「手回しが良いと言っかなんというか・・・」

骸は俺に顔を近づけてきた

「またいずれ・・・君の始めてを頂きますよ」

「おい問題発言すんじゃないなむぐう！！」

骸は俺の唇に自分の唇を重ねてきやがった
しかも舌を入れてきた

「ちゅぱ・・・ちゆる・・・んちゅ・・・」

「・・・ぷはあ！何すんだよ！」

「クフフフフフフ・・・美味しかったですアクセル」

骸は俺に軽いキスをし去っていった

俺は呆然とするしかできなかった

前世でも女性関係を持った事がないからだ

しばらく呆然としているとツナが縄を解いてくれた

「大丈夫！？アクセル兄！！」

「ああ・・・骸のヤロオ睡眠薬の原液なんか使いやがって・・・
それよりツナ勝てたのか？」

「うんバッチリ！っていてててて！」

ツナがいきなり痛みを訴え倒れこんだ

「小言弾の死ぬ気モードはかなり身体に負担をかけるみてゝだな」
「ガク・・・」

「あまりの痛みに気絶しやがったか」

「とりあえず寝かせてやれば？」

「そうだな俺も家庭教師として眠い・・・スピ〜シュピピピ〜」
「って寝るのはや・・・」

リポーンはツナに寄りかかり眠り始めた

俺は立ち上がり黒曜ランドを出ようとしたら

雲雀に見つかり雲雀の家に強制連行された

俺は雲雀の部屋に連れ込まれフローリングの床に正座させられた

「・・・でなにがあつたの？」

「いや別に何も？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あの・・・・・・・・いやだから・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あの・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「はい・・・・・・・・正直に言います」

俺はロープで縛られて骸に馬乗りされて・・・・・・・・そのお・・・」

「なに？」

ひ、雲雀の後ろに修羅王が見える・・・・・・・・こえ・・・・・・・・

「イ・・・ぷ・すされました」

「もう一回」

「で、ディープキスと普通のキスされました・・・」

「アクセル・・・・・・・・」

「は、はいい！」

俺は背筋をこれでもか！と言っぐらい直す

雲雀は俺を押し倒し俺の唇を奪い舌を入れてきた

もうやめてえ！雲雀い！俺のライフは0なんだぜ！これがな！マジで理性が・・・

「ちゆる・・・・・・・・むん・・・・・・・・ちやるちゆる・・・・・・・・んちゅ・・・・・・・・」

「ぷはぁ！」

「アクセル・・・・・・・・アクセルは僕のものだから」

雲雀は再びキスしてきて

俺は何とか理性を保ち雲雀から脱出し自宅に戻り

家を完全にロックしてベットに入った

今日は俺の理性が粉碎・玉砕・大喝采されるとこだった・・・

アクセルと凧

ども雲雀と骸に深く熱いキスされたアクセルです
今日は気分が優れないので風紀委員のメリットの欠席を使って今は
家に居ます

本日は新学期だけど今日は休んでいます

「・・・いくぜ狼さん・・・」

・・・しゅん・・・

「・・・・・・・・出かけてこよう・・・・・・・・」

私服に着替えて家を出る
もちろん風紀委員の腕章はなし
並森商店街

さてなんか買うか・・・

俺はたこ焼き屋に寄った

「たこ焼き10個入りください」

「あいよ、ほら700円」

「有難う御座います」

俺はお金を渡して

公園のベンチに座りたこ焼きを食べ始める

・・・チーズ入り美味しいな・・・

餅入りもいけるな・・・

今日はレーツェル・ファインシュメツカーになるか
さてサングラス掛けて・・・ってやめとくか

「アク・・・セル・・・?」

名が呼ばれた気がしたので前を見ると凧が居た

「・・・凧・・・?」

「アクツセル!」

凧は走って俺に近づいてきた
そして抱きついてきた

「おいおい公の場だぞここは?」

「あつ／／／／／ご、ごめん・・・／／／／／」

凧は離れてくれた

「にしても久しいな」

「ほんと・・・私を置いてイタリアに行かないですよ・・・」

「ごめんな、じゃあケーキでも食べに行こうか?」

「え?・・・いいの・・・?」

「ああ行こうぜ」

「うん!」

凧と手を繋ぎケーキ屋に向かった

で着いたら様々なケーキが目の前に広がっている

「どつれにしようかなあ」

「・・・私は・・・どれでも・・・／／／」

「じゃあ俺は・・・モンブランにしよう」

「・・・私も／／」

俺達はモンブランを買い早速食べる事にした

「美味しいな」

「うん／＼／＼／＼」

「この店は昔から変わらないな」

「ア、アクセル・・・」

「ん？」

フォークにモンブランに刺し俺に向けている

「え？」

「あ、あゝん・・・／＼／＼／＼／＼／＼／」

「え／＼／いや／＼／」

「や・・・なの・・・／＼／＼／？」

涙目で上目遣いは卑怯です・・・

「あ、あゝん／＼／＼／」

「あゝん／＼あむっ・・・う、うまいな・・・／＼／＼／」

俺たちは直ぐにケーキを食べお互いに別れた

気付けばもう時間が過ぎたな

ぐく・・・腹減ったな・・・

そうだ！竹寿司行こう！

俺は竹寿司に向かった

俺は竹寿司の扉を開けた

そしたら

「ちゃおっす」

「あり？リボン？」
「アクセル兄？」
「ツナ？」
「ハロー」
「ビアンキ？それに・・・え〜つと・・・ハルちゃん・・・？」
「何で疑問系なんですか！？」
「っで？なんでここに？」
「進級祝いに寿司食いに着たんだ」
「な〜る」

俺も席に着き寿司を注文した

「でも金はいいのか？」
「大丈夫だよりボーンが・・・つていない！」
「ありや〜りやりや」
「ど、どうでしょう！?!？」
「しゃ〜ね〜な〜俺が払ってやるよ」
「で、でもお金は!？」
「すいません幾らですか？」
「え〜つと・・・大トロにアジにイクラ、中トロ、軍艦巻き
卵にブリにタコにイカ、ネギトロとうににその他色々で・・・
お会計、14万9730円になります」
「たか!?!」
「はい」
「はい15万円お預かりいたします」
「ええ!?!？」
「なんだ30万持ってちゃ可笑的いか？」
「なんでポケットマネーでそんなに持つてるの!?!?!」
「いいじゃん」
「230円のおつりになります」

「あい、それじゃあ俺帰るからグッバイ」

スクアード

俺は今バイクを飛ばしてます

え？何でかって？

そろそろバジルが来るからですよ

スクアードもいるもいるし

そして爆発が見えました

俺は更にスピードを上げウイリーでジャンプしスクアードに体当たりした

が避けられた、しっかり着地しバイクを止める

「うう おおい！だれだあ！！！」

「なあゝに通りすがりの・・・風紀委員だ！」

「ア、アクセル兄！」

「アクセル！」

「アクセルさん！」

「アクセルだとお！？」

俺はツナに近づく

「後は任せろ」

俺は武器を腕に装着する

「うう おおい！アクセル・アルマアこんな所で会うとはなあ
！」

「相変わらずうるせえ奴だ」

「うう おおい！ボンゴレボス最有力候補がこんな所なやってんだあ！？」

「俺は今、学生だそんなもんには興味はないね」

「てめえ〜つと会ったからにはここで首を貰うぞお」

「やれるもんなら・・・な！」

俺は一気に加速しスクアール口に接近する

スクアール口は左手の甲に装備されている剣で切りかかってくるがこちらも肘ブレードで受け止める

お互いに同時に飛び上がり斬り合いになる

仕込み火薬を放ってくるがワザと受けその爆風を使い加速し腕を回転させ殴りつける

そのまま斬り合い殴り合いの応酬となりながら地上に降りる

「相変わらずの戦闘センスだな」

「うゝおゝおい！アクセル！てめえおれと来い！」

「断るなんの利益があつてザンザスにつかなきゃいけないださつさと帰れ」

「ちっ・・・」

帰るかと思つたがツナが持つていた箱を奪つた

「うゝおゝおい！こいつは貰つていくぞお！！」

「そうはさせるか！玄武剛弾！！！」

玄武剛弾はスクアール口に向かうが掠つただけだつた

「くっそ！逃がしたか・・・」

「アクセル！」

俺の名を呼んだのはディーノだつた

「なんだ馬か」

「あらら・・・ディーノって呼べよ・・・」

「それよりバジルを病院へ、俺は警察の相手をする」

「ああわかった」

俺は警察に向かい風紀委員の腕章を見せ帰ってもらった

5日後のそして夕方・・・

ヴァリアーと戦うためみんなは特訓をしている

俺はというと・・・まあそれなりな

バイクで家で向かう途中

ヴァリアー陣とツナ達が向かい合っていた

更に家光とチエルベツロがいた

「ちょうど良い所に夜空が着ました」

「・・・」

「ザンザス・・・って夜空はどうやって戦った？」

「夜空は天候ではありません」

だな

「ですので勝利数は数には含みません」

「・・・」

「では明日の対戦を発表します、明日の対戦は・・・晴れ」

対決！アクセル対ヴァリアーの夜空

俺は晴れの対戦を見ずにずっと山にいます

ココさんの能力とサニー、トリコの能力の練習してます

いや、髪はそんなに長くないに触覚が40万本ってどついつ事？

神から触角の数教えてもらいました

でも危ないんで毒地獄ヘルボイズンはやってません

4日ぐらい経ったかな？

ブルルッ

ン？電話？

「はい？」

『ちやおつす』

「あありボーンかなんか用？」

『今日はお前の番だぞ』

「あつまジ？じゃあ直ぐに行くわ」

ピッ

因み今は9時

急ごう

バイクを飛ばして・・・

並中到着

さて今回は・・・体育館でやるんだ

霧戦もやるんじゃない

俺が行くと既に皆が居た

「ちやくお〜」

「アクセル兄い！遅いよ！」

「これでもバイク飛ばしてきたんだぜ？」

「バイクで来たの!？」
「まあいいじゃん」

俺は体育館の中央で待っているヴァリアーの奴と向かい合う
そしてツナ達の周りに檻の様な物が下ろされる
そして明かりが消える

「夜空、闇の守護者の使命は全てを飲み込み無へと返す混沌の闇
ですので暗闇でも勝負とさせて頂きます

対戦者以外の皆様には赤外線カメラで観戦して頂きます」

「暗闇とはゲームにとって最高の環境だね」

「アクセル終わりだな、しっししし」

「そんな!これじゃあアクセル兄はぜんぜん見えないよ!」

確かに普通の人間では全く見えない

「では夜空、闇の守護者アクセル・アルマー対ゲーム バトル開始
!」

バトルが開始しゲームはかなりの速さで動いている
さすがはヴァリアーと言った所か
音も立てないあたり流石だ

「な、なにあれ!」

「なんつく速さだ!」

「ゲームはヴァリアーの中でも隠密活動能力が高くヴァリアー随一
なんだぞ」

ツナ達の声は聞こえない
だが空気の流れで分かる

！来る！

ゲームは手袋に刃物を付けた物で攻撃してくる

俺は普通に避ける

次々と攻撃してくるが避けていく

「す、すごい！」

「でも何でアクセルは相手の動きが分かるみたいに避けれるんだ？」

山本が疑問に思う

「人間には、目には光を受け取る細胞、視細胞があつてな

アクセルは視細胞は通常の数百倍この暗闇でも昼間のように明るく見えるだ」

「ええ！？」

俺は腕を回転させる

ゲームは向かってくるが頭を掴み持ち上げる

「あがああ！！！！」

「・・・闇に染まり・・・闇を喰らう・・・」

ゲームを投げ捨てる

「この切っ先触れれば切れるぞ！」

加速し肘ブレードでゲームを切り刻む

「うがあああ！！！！！！！！！！」

「受ける！舞朱雀！！」

そしてゲームの上を取り

「決める!!!」

最後の一撃を決める

リングのチェーンも切り

リングを合わせる

「これでいいか?これかな」

「夜空のリングはアクセル・アルマーが完成させました

この勝負は沢田氏側の勝ちですがこの勝負は数には含みません
次回の対戦は霧」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5179v/>

家庭教師ヒットマンREBORN! 夜空の守護者来る！

2011年10月13日17時53分発行